

親睦とは何か

組織立てられた親睦

クラブというものが、もともと会員相互の親睦と扶助から始まり、やがてそれが奉仕という思想を生みだし、これに基づいて実践活動として、ワイズにおいては、YMCA 奉仕、クラブ奉仕、地域奉仕、国際奉仕を行う社交団体と発展した。ワイズメンはそのクラブ活動を通じて奉仕の内容を探求し、それを実践することを誓った人たちなのであって、私たちはこのワイズメンとしての団結の意識を「組織立てられた親睦」「組織立てられた友情」と呼んでいる。この言葉は、会長・主査研修の場で、またよく西日本区の研修の場でも出てくる。小堀憲助中央大学教授の言葉である。この小堀教授の奉仕クラブ組織論の研究会「千草会」で学んだのであるが。(すでに小堀教授は鬼籍に入られている)

この意味は非常にわかりづらく、ワイズメンがその運動の過程で自分の立場を端的に明らかにしたいいろいろの言葉がある中で、この「組織立てられた親睦」「組織立てられた友情」という表現ほど、よくみると実態にそぐわない言葉はなく、ワイズ運動の入門者と部外の者に誤解を与えるものはない。

この言葉は、親睦または友情をあたかも飲み会や、徒党を組むという意識であるかのように思われがちであるからだ。また、「ワイズは親睦に始まって、親睦に終わる」などというのも、誤解を生ずる表現として認識しておかなければならないことである。

つまりそれは、ワイズは親睦さえあればそれでよいのかという疑問が容易にでてくるからであり、また、親睦と友情を中心とした団体意識があればそれでよいのかということにもなるのである。だから、みんなで集まり、仲良くなる、本音を言い合うのが最善だと勘違いする。それは意味のあることには違いないが、それが本意ではないのだよというのである。

そこで「組織立てられた親睦」「組織立てられた友情」という言葉によって示されるクラブ活動の実態に立ち戻って、それが本来どういうものであるかということの分析から初めてみることにする。

まず第一に、親睦はワイズメンズクラブの目的の一つであることには違いはない。したがって、会員相互の友情の強化もまたワイズメンズクラブの目的である。しかし、ワイズメンズクラブには、その親睦と友情を達成する過程において、奉仕を追求するという重要な要素が入ってくることを忘れてはならない。もっと正確に言えば奉仕を追求するための会員相互の親睦と友情の強化であり、と同時に、強化された親睦と友情はさらに強化された奉仕の追求に通ずるということになり、このようにして事態は(友情親睦→奉仕の追求→友情親睦→奉仕の追求)という自転作用を営むのがワイズメンズクラブの理論的実体なのである。

友情と親睦は、単なる社交的な意味での友情と親睦、言い換えれば、飲み食いとかパーティ、イベントの場における友情と親睦を目的とするものではないのである。あくまで人々の

ためにならうとするアイデアを交換する場としての親睦と友情を目的とするものとするのである。この一連の行動がさらに新たな友情と親睦を生むのである。

であるから、奉仕活動は行うが、それはあくまでも親睦と友情を強めながら行う。そして、効果的な補奉仕活動は効果的な親睦と友情を生み、効果的な親睦と友情はさらに効果的な奉仕活動を生むという具合に自転作用が営まれる。こういう意味あいだからこそ、ワイズメンのクラブ活動の重要な要素にゴルフあり、ワインの会あり、納涼会あり、部会あり、8ワイズがある。しかし、しばしばワイズは、ゴルフの目的でゴルフを行い、ワインの目的でワインの会があり、部会の懇親の目的で部会をやっている向きはないであろうか。絶対ないとはいえないのではないだろうか。というよりは大半がそうではないかと思われる。ここに部外者から見れば、ワイズは道楽遊びにしかすぎないと見られる原因があるのかもしれない。もし一般人からこのように見られる要素が少しでもあれば、地域奉仕など、まして YMCA との連携も Y からは部外者と見られるように、ワイズの奉仕活動は軽く見られ、浄財を投じたつもりが何か効果が無いと感じられるのである。だから、色々な行事もいいが、これらが均しく友情を増し、奉仕の追求を強化する一過程としてとらえられるように行われなければならないのである。

ここがクラブ活動を指導する者の側からすると、大変難しいタクティクスを必要とするところなのである。一方においては、ワイズの本質である Y への奉仕、地域国際への奉仕、メネット、その他国際からの要請や西日本区の要請の追求のみで割り切ろうとすれば、クラブ活動はまことに厳粛で笑いのない実践運動となってしまうし、また他方において、親睦と和合とに徹し切ろうとすれば、クラブ活動は単なる自己満足と欺瞞と我がままによって蹂躪され、ワイズの目的は無限に墮落の方向に自転をはじめ、優れたワイズメンを絶望させる結果となる。いずれのクラブも現実においては上に述べた両極端の間を行ったり戻ったりしていることになるであろう。この点にクラブの管理運営に当たって尽きせぬ悩みがあり、尽きせぬ工夫が必要とされると同時に、また尽きせぬ喜びのわいてくることもある。ワイズはすでに、奉仕活動を行う源泉たるクラブ活動の場において、この不安定の根底を持っており、指導者の優劣に一目瞭然とその浮沈がかかるようになっており、これを安定させる特效薬はない。ここにこそ、ワイズメンの無限の努力が期待され、この苦労の中からワイズメンたるの誇りが生まれ出てくるのであろう。

このように、クラブの管理運営に当たって、理論上は対立概念ではないところの親睦と奉仕とが、現実のタクティクスの問題としては厳しい対立概念として現れ、これをどう裁くかに例会をはじめ、あらゆる会合の成否がかかっているのであるが、ここに一点だけはっきりとしている点があることを指摘しておかねばならない。それはワイズの和合と親睦は善と悪との間の橋渡しをするものではないということである。

「ワイズビジネス交流会」の危うさ

ワイズメンがワイズを営利目的で利用することを禁じている。

ワイズメンはその仲間の会員から、彼または彼女が取引関係を有している他の実業家に普通与えないような特典を、仲間のワイズに与えるのは、競争業者に対するワイズメンの責任に反することであり、またワイズの奉仕の原則に反することである。真の友人というものは互いに何ものをも要求するものではないし、利益のために友人間の信頼を乱用することはワイズの精神から遠くかけ離れたものである。

さて、第二に「組織立てられた親睦」とはいうが、実際組織立てられているのであろうか。

確かに、ワイズには役員会や会長、書記、主査などの役員があり、また各種の委員会、会員の総会である評議会があり、その限りにおいて組織はあり、また奉仕クラブとして、他の一般の社交クラブに比べて組織は整っている、しかしこの故に「組織立てられた親睦」ということが直ちに結びつくのであろうか。そこでワイズメンズクラブが何のためにあるのかを考えてみるとよい。

その答えは極めて簡単である。つまり奉仕を実現するためである。(それがYであったり、地域であったり、国際であったり) 奉仕を実現するために多くの人たちが集まるのだから組織があると考えられ、さらに、奉仕を実現する多数の人がその作業を行えるために組織があるということが容易にわかるのである。そこで問題は、各クラブ会員が奉仕を実現するためにどのような仕組みになっているかということになるであろう。

ところで、奉仕を実現するのは、いったい誰であろうか。ワイズメンズクラブは奉仕団体なのだから、奉仕はワイズメンズクラブが団体として実現するのであって、各クラブ会員はクラブ活動を通じてその一端を担うにすぎないとも考えられようし、また逆にワイズメンズクラブを構成するのは各会員であって、各会員の奉仕の実現の努力がなくてはワイズメンズクラブは奉仕団体足り得ないとも考えられる。これが奉仕団体の在り方の両極端を示すものである。いろいろなクラブもこのどちらに重きを置くかの運動が行われていると言っている。

ワイズはまず第一に、各会員の奉仕活動のアイデアを尊重することから始まる。何はともあれ、一応のその社会的地位を得るに到った個人の知性と自我の発展とを、ワイズはクラブ存立の第一の根拠とみるのである。言い換えれば、一人ひとりのクラブ会員の人生経験から得た知恵と思索を、ワイズは根底においているのである。このように見ると、根本的に、知性ある自由人の自我の発展を前提として存在し、各人がそれぞれクラブ存立の重要な礎石となることを前提としているのであるから、徹底的な個人主義、すなわち個々の会員中心主義をとっていることがわかるのである。この立場からみると、ワイズのおかげで(それは西日本区、部にも言えることだが)各会員があるのではなくて、各会員のおかげでワイズがあると言っても過言ではない。

まじめに何年かワイズ運動を続けてきたワイズメンが、どことなく他の人と違う上品な風格が備わっていると言われるのも、こういった点に由来するのではないか。

第二に、ワイズは各会員の奉仕活動のアイデアが例会において交換され、相互に刺激し合うことを通じて切磋琢磨されてより優れたアイデアになることを期待している。単にプロ

グラムの中の卓話だけでなく、あらゆる活動、それは会長として、書記として、主査として、会員として、会計として、そのような色々な役職を通じて、会員が互いに話し合いを、時には酒を交えながら、行ううちに、自分の考えと他の会員の考えが交流し、やがて止揚された高次のアイデアに到達するのである。このようにして、すでに優秀な自我の自由をもつ会員が他の優秀な自我の自由を持つ会員と接することによって、より優れた自我の自由に到達することを前提として、これを可能にするためにクラブ組織の目的の1つがあるのである。

かくして、各会員がクラブの各集会を通じて接し、より優れた会員となるという結果を招来するに当たって、クラブ組織がその過程において媒体をなしていることがわかるのである。

そして第三に、各ワイズメンはクラブを離れた場、つまり自分の職場、家庭、その他 YMCA での機会において、ワイズ運動を通じて得た優秀なアイデアをもって行動を行う。

このようにして、ワイズメンを個人を中心として眺めるかぎり、ワイズメンズクラブの集会前の個人のアイデア、ワイズメンズクラブ集会中に各会員と交換されて生まれたより優れたアイデア、ならびにワイズメンズクラブ集会後の各会員個人の社会的実践活動が、ワイズ運動の実態の主要な部分を占めるのである。

ワイズメンズクラブはしたがって、本質的には個々人のアイデアの集合体としての団体なのである。

さて、このようにワイズ運動の基礎である個人主義・人格主義(献金も個人からのものを前提にしている)を明らかにしたうえで、ワイズ運動はただこの個人主義・人格主義だけで終わるのかという問題が起こってくる。ここにワイズメンズクラブのいまひとつの側面があらわになる。それは地域奉仕と国際奉仕の分野である。ワイズメンズクラブは個々の会員が行う奉仕と、クラブとしての決議に基づいて団体として行う奉仕の二つを行う場合がある。この場合において個々のクラブ会員はその団体の決議を構成する一単位として団体の背後にその姿を埋没させてしまうのである。したがって、この分野においてこそ、ワイズでは「組織立てられた親睦」が十二分にその機能を発揮することになるのである。

このように考えてみると、ワイズには二つの異なった性質の奉仕が存在する。その1つは個人奉仕であり、ここでは個々のワイズメンの知性と人格がワイズの集会に参加することによって他のワイズメンの知性と人格に接し刺激を受け、これがより優れた知性と人格となって社会全般に還元されるのであり、ここではワイズはその媒体をなすにすぎず、組織立てられた親睦は存在しない。いまひとつの奉仕は団体的奉仕であって、ここにおいては、ワイズメンズクラブは団体として、必要があれば諸々の奉仕、Y への奉仕、地域奉仕、国際奉仕を行う。ここでは、ワイズメンズクラブは、個々の会員の存在とは別に団体の名において奉仕活動を行うのであって、組織立てられた親睦や組織立てられた友情が十二分に存在するということになるのである。

以上、親睦とはクラブが団体として組織的に奉仕を行う上で、ある目的に向かって、クラブがどうそれを実行していくか、そのためには組織の中での会員一人ひとりの相互理解と

寛容、理解、信頼、友情などを培い、親睦を深め、組織として動くことを「親睦」というのである。